

圧倒的なパワーとリーダーシップで アクティブ・ラーニングを牽引する

茨城県立並木中等教育学校 校長 中島博司

〈企画・取材・構成〉

河口 竜行 渋谷教育学園渋谷中学高等学校 国語科教諭
産業能率大学経営学部 兼任講師

昨年、隔月4回の連載「生徒と教員のアクティブ・ピーイング」を担当させていただきました。河口竜行です。お読みいただいた皆さま、またご感想を寄せていただいた皆さま、ありがとうございます。

今回のシリーズでは、授業や学校が大きく変化しようとして、現在の状況のもと、実際に改革への一歩をすでに踏み出し、実績を挙げられている方々にお話を伺う、インタビューを行うことにしました。

シリーズ前半は、名実ともに学校のリーダーである「校長」という立場におられる方々に、後半はそれ以外の立場で活躍されている方々にご登場いただき、そんな企画にしたいと思っております。

第1回は、茨城県立並木中等教育学校校長の中島博司氏です。
**アクティブ・ラーニングと
いう言葉は使い続ける**

河口 中島さんといえば、いろいろな所で学び続けられている姿勢、FB等での発信など、フツ

トワークの良さが目立ちます。中島 はい、まさにそのことこそ、私が校長として行うことだという考えを持っています。学び続ける背中を見せながら、豊かに情報発信をしていく。これが私のリーダーシップの基盤だと思っっているんです。

最初に校長として前任校に着任した2015年から、私の学びは加速しました。その中からアクティブ・ラーニング（以下AL）の「目的」が生まれてきました。それは、「アクティブラーナー（能動的学習者）の育成」です。いま、一時に比べると、ALという言葉が耳にする機会が減ったと感じる方がおられるかもしれません。しかし、私はALという言葉は使い続けるべきだと思っっています。定義があいまいになりがちなALですが、これに関する私の考えはいたってシンプルです。「アクティブラーナーを育成する」という目的に向かっているのだから、それはALなのです。大事なものは目的であって、手法ではないのです。

河口 キーワードの存在そのものが大切だ、というお考えなのですね。さて翌2016年が、並木中等教育学校に着任された年でした。中島さんが校長として最初にされたのは、どのようなことだったのでしょうか。

中島 実は、本校では私の着任する前の年から、ALに取り組み始めています。さらに本校は、ICT教育の拠点校にもなっているため、生徒がタブレット端末を持って授業を受ける、ということも始まっています。先生たちのICT技術も進んできていて、プレゼンソフトや教育支援アプリを使ったりする授業も行っています。そこへ着任した私は、自分の学びの中から情報を提供し、また漠然とした概念を具体的な「ことば」として定着させ発信することを始めました。生徒や先生たちが自分たちの行っていることの意義を自ら確認しながら学んでいくようにという思いからです。まず2016年のALについて3つのキーワードを作りました。それは、「1. アウトプット、

2. 協働、3. リスペクト」です。アウトプットと協働は、ALを語る上でよく言われることです。私もこれらは欠かせないものであると思っています。そしてそこへ、リスペクトということばを私は加えました。この2016年は、ALを行う学校が徐々に増えてきたと感じられる時期だったのですが、その中で、うまくいっている学校もそうでもない学校もたくさん見ました。いったい何が違うのかなと考えたときに、気づいたのが「リスペクト」だったのです。そして並木中等の授業を観たときには、ああここにはリスペクトがある、と思いました。

リスペクトこそALのキーワードだ

河口 互いの尊重・尊敬という

から教員。たとえば先生がよいよALを考慮した授業にシフトさせようとする。そんなときにああこの先生が意図をもつてこのような展開の授業をしてくれるんだな、という思いがあれば、生徒はそれに積極的に参加しようとなります。3つ目は教員から生徒。よくこのような声を聞きませんか。「うちの生徒には基礎学力が足りないからALはできない」というような。しかし私は「実はうちの生徒は話し合ったりするのが得意なんですよ」などといったところを見つけ認めたい。それが教員の見つけたいところと考えると、ALだからこそ、これができる側面もあります。4つ目が教員から教員です。互いに授業を観たり、日常から率直に意見を交換するなど、まさにリスペクトが協働の基本になりますから。

河口 多くのインプットから

もあつたのではないですか。中島 講演等の壇上でこのリスペクトについてお話ししたときには、確かにたくさんさんの反響をいただきましたね。そして学校のほうも、さっそく志願倍率の増加としてALの効果が表れました。この志願倍率というのは学校という場において大切な指標ではありませんが、私はただの人氣取りでは続かないと考えています。やはり基本は学力の向上です。これに関しては、以前ちょっと気になったことがありますが、それは、講義では基礎学力、ALではコミュニケーション能力、であるとか、講義の授業かALの授業か、など二項対立になってしまっていないか、ということ。いうまでもなく、より学力をつけ、さらにさまざまな力をつけるのがALであるわけです。

そのことを理解しやすくし、

20」です。教員が自分の授業をメタ認知する指標としてほしい、また、最初からALをたくさんやらうと無理をしなくてもよいということ。を伝えたい、という思いから考案したものです。「論理力」から「日本語の4技能」そして感性を磨く授業へ

河口 いまの私の授業のAL指数を考えてみたら、AL70ぐらいでした。数値化するとやはりわかりやすいですね。さて次はすでに広まりつつある「R80（アールエイティ）」について、その背景を含め、教えていただけますか。

中島 R80とは、授業の振り返りを80字以内で、しかし必ず2文で書き、接続詞で結ぶ、というシンプルなもの。使ってください。先生や学校が増え、広まってきたという実感を持っています。Rは、リフレクション（振り返り）とリストラクチャー（再構築）のRです。ここで身につける「論理力」をALでの学力の向上につなげようと考案したのですが、想定以上の効

果が上がっているように感じます。本校ではもちろんいろいろな科目の授業で実施していますし、他校には、生徒さんたちが

なかなか学力的に自信を持っていない状況の中、R80を用いて思考力・判断力・表現力を磨いた結果が学力向上に結びついた学校の例もあります。大学入学共通テスト試行調査の国語の問題に、R80とよく似た指示の問題が出題されていたときには、同じことを考えているものだと驚きましたね。

そもそも私はALが最終的に目指す力は「論理力」。「自分の考えを整理して伝える力」だと考えているんです。それで、論理力の養成について学んでいるうちに、字数を決めることや接続詞で結ぶということを思いつきました。一定の内容について80から100字程度にまとめるとは、かなりの思考と工夫が必要になってきます。以前、私は日本史の教科書の執筆をしていたことがあり、その中では、限られた字数に必要な事柄を入れて文章を書かなければならな

い場面が多くありました。その時に自分の中で起こっていたことが、論理力を伸ばすことだった、と気づいたので。

本校の生徒たちの活動を見た方に、人に説明する中で「なぜなら」を使う生徒が多いという指摘をしていただいたことがありません。考える力が話す力へとつながっていたのだと、嬉しく思いました。

河口 中島さんの考案・発信では、内容はもちろんですが、やはりネーミングが光りますね。あとはTVでも紹介されたTO学習でしょうか。

中島 TO学習(Teaching Others)とは、そのまま「他の人に教える」という意味ですが、主に異なる学年の生徒同士が行うペアワークやグループワークを指します。ここでは生徒たちは終始ニコニコして授業に参加しています。おしまいに簡単な小テストをやるよと予告しておく、教える側の上級生たちは責任がありますから、より親身に熱心になりますし、それで良い点数をとったらもう二人で大喜びです。

この授業を行うと、当然、他の学年を担当する教員同士が組んで一つの授業をデザインすることになります。教員間のコミュニケーションも増え、スキルアップにもつながります。

あとネーミングといえば、「日本語の4技能」(日本語を読む・聞く・話す・書く)でしょうか。英語で言われる4技能、これはもとより日本語でも大切なわけです。このことは今年の学校の目標にも入れました。これは国語だけではなく全ての教科の授業で意識していくべきことだという考えからです。

また今年にはAAL(アート・アクティブ・ラーニング)というのを全国に発信しています。教科の学習というのはことばに集中してしまいがちなものですよ。授業では、色、形、音、などは扱われにくいものです。そこでたとえばペアやグループで、ことばを一切使わずに絵で表現したり、動作や表情で互いに伝え合ったりなどということをするわけです。左脳の時代から右脳の時代などということば

もありませんが、論理力に加え、感性を磨くことの重要性を訴えていきたいと思っています。

ALがすべての人を幸せにする。ALはこれからこそ大切

河口 考案された多彩なALの「アイテム」は、実際に学力向上に結びついているのですね。

中島 ALが授業を変え、生徒を変え、そして教員が変わる。学力面での効果を厳密に測定することは容易ではないですが、模試の成績や対外的な活動などに、端的に本校生の伸びは表れてきています。一番の変化は、生徒たちがニコニコして授業に参加していることですね。

なぜALかという時に、私は以前、世の中が変わる、それにつれテストが変わる、と説明していました。しかし哲学者の苦野一徳さんのお話をうかがった時に、「人間は恐怖では変わらなない」のだということを学ばせていただいたんです。本当にその通りだな。しかし「楽しい」「嬉しい」ならば変わるのです。今は、ALは「授業を楽しくする



▲中島博司校長のALサイン

ため」という説明もしています。

校内では毎月一週間を「授業ちよつと見週間」と題し互いに授業を参観しやすい工夫をしています。それで、面白い授業があると、みんなで見に行く雰囲気ができました。たとえば化学実験を英語で行う授業、江戸時代の算額を扱った日本史と数学のコラボ授業、家庭科と理科とが協力して作る添加物に関する授業などが生まれました。学ぶ楽しさを味わうことで、学び続ける人になっていき、そして人は学び続けると幸せになる。そのように私は考えています。

河川 まさに自ら学び続けておられますね
中島 校長をしつつ、最近増えている自分の講演以外に、一般の参加者として、セミナー等に出かけて学んでいます。特に、教員の世界を超えた広い範囲の人々とともに学ぶことが、最近は大きな学びになっています。教員の皆さんにも、積極的に外で学ぶ機会を提供しています。学校全体の取り組みにしているためには、外からのインプットは必須です。

河川 突然なのですが、いまもしも校長という立場でない一般の教員だったら、どんな授業をされたいですか。
中島 私が行っていた日本史の授業は、いわゆる受験向けの授業でした。AL指数でいうとALゼロです(笑)。
 今、授業を行うのであれば、まずはAL10ぐらいから始めます。その授業で印象に残った人や出来事についてペアワークで1〜2分語る機会を2回持つ。

もうこれで授業への集中度は飛躍的に上がるでしょう。また、高2と高3とのTO学習で、たとえば明治まで学んだ生徒と、平安時代まで学んだ生徒とが、なぜ歴史を学ぶのかについて対話するとか。やはりいかに共有するかが大事だと思います。
河川 アイデアが止まりませんね。
 聞いています。さで最後に、中島さんが教員を志したきっかけはあったのですか。
中島 私は学校が好きだったんです。小中高ずっと。その好きな場所で仕事をしたいと思いい、中学生の時は中学の教員、高校生の時は高校の教員になろうと思っていました。理科系の科目のほうが得意だったので、高校の先生に「好きなものはない」と言われ、答えたのがインカ帝国やらマヤ文明だった。いわゆる、好きなことを仕事にする、というのができました。好きなことに打ち込む中で、次第に日本史の授業での成果も挙がりました。その後は教育委員会や教頭も経験しましたが、こう

していま校長になり、また自分の好きな研究ができる、と嬉しく思っています。その対象がALなのです。社会の変化があり、身近で具体的なものとしては、新テスト、新学習指導要領と、これからますますALの重要性が増してきます。ALが一番研究のしがいがありますね。

ALで、生徒たちにはアクティブラーナーとなって、それにより幸せになってほしいのです。校内ではかなり定着してきました。あとは、他の学校へも、私の学んだことで何か貢献できればと、「種蒔く人」として講演その他の活動を続けていこうと思っています。

* カメラを向けると、いつもの笑顔でALサインの中島校長。インタビューにお邪魔した私に、専用のプレゼンを披露してくださいました。全国をリードされるパワーの源は、リスペクトを携え、ご自身が楽しみながら仕事をされていることでした。「ALはこれから」。次はどんなアイデアが繰り出されるのでしょうか。